

<論説>アメリカ知識人の社会史のためのノート : D  
・ベルを中心として

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 矢澤 修次郎  |
| 雑誌名 | 社会労働研究  |
| 巻   | 26  |
| 号   | 2   |
| ページ | 1-15  |
| 発行年 | 1979-12-20  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10114/00018175">http://hdl.handle.net/10114/00018175</a> |

# アメリカ知識人の社会史のためのノート

——D・ベルを中心として——

矢澤修次郎

はじめに

本稿は、五十一年日本社会学会大会（於松山商科大学）の「知識人論」に関するテーマ部会における私の報告に加筆、訂正を施したものである。このテーマ部会においては、きわめて個性の強い知識人としての社会学者（E・フロム、清水幾太郎、D・ベル）がとりあげられ、その思想内容がマルクス主義との対比において明らかにされることが要求された。したがって、私の報告もその線に沿ったものになっていることを予めお断わりしておきたい。しかし私の問題関心は、単なるD・ベル論を展開するといった狭いものではなく、アメリカ知識人の社会史を書いてみようというより大きなものであり、したがって、D・ベルの思想をアメリカ知識人の社会史の一角に位置づけるという作業を不可欠のものにした。結果としては、いささかまとまりを欠いた報告になってしまったが、私の研究のまとめの方向性を考慮に入れて読んでいただければ幸甚である。

## 一 アメリカ社会における知識人

知識人 (Intelligentsia) という概念は一八六〇年代以降のロシアに起源を持ち、ドレフュス事件によって西洋化された (Intellectual) ことは周知の事実である。知識人たちは、みずからの関心の焦点にイデオロギー的なものを据えると同時に深い疎外感を併せ持っており、観念の戦争にアンガージュしながらも自分が所属する社会から自己を引き離そうとしていた人びとであった。

アメリカにおいてはじめて知識人の概念が用いられたのは、おそらく一八九九年のことだったろうと考えられている。この年ウィリアム・ジェームズは、ドレフュス事件に対して評論を加えるという形で「アメリカにおける『われわれ』『知識人』は、こうした制度〔教会、軍隊、貴族制、忠誠〕から個人主義と自由という望ましき天賦の人権を守るために働かなければならない」<sup>(1)</sup>と述べ、ラディカルでユートピア的反制度的な色彩の強い知識人概念をアメリカに導入したのだった。

L・フオイヤーによれば、二十世紀初頭のアメリカにおける知識人には二つの意味があったという。<sup>(2)</sup>一つには、知識人は「勤労者で大学卒業以上の文化的能力を持つもの」をさし、二つには、「上、中間階級の出自を持ちながら、その出自を脱して人民の中へを志向するもの」を意味した。このような二つの異なった意味を込めて人びとが知識人という用語を使ったのには、もちろんそれなりの理由があった。というのは、両方の意味の知識人は、選ばれた者としての使命感と疎外感を持ち、政治にかかわり、思考の様式は宗教や科学ではなくてイデオロギーである点で共通点を持っているからである。

しかしその後の知識人の歴史は、両者が相対的に独立した形でそれぞれ別個に継承、発展させられたことを示している。すなわち第一の意味の知識人は、労働者の学習・教育運動の発展のなかで受け継がれ、いわゆる「労働知識人」<sup>(3)</sup>を作り出していったのであり、第二の意味の知識人は、グリニッチビレッジに集い雑誌の編集を担い劇場集団を構成していったような「新しい知識人」<sup>(4)</sup>（一九一〇年代）、やパリの「エミグレ知識人」<sup>(5)</sup>（一九二〇年代）が体现していったのである。

一九二九年の大恐慌の発生を契機として、多くのアメリカ知識人は左傾化し社会的コミットメントを深めていった。プロレタリア文学芸術運動、産業別労働組合形成運動、諸政治政党運動、学生運動など多くの知識人乃至知識人関連運動が展開され、それなりの量と質を持ちえたのである。この同じ過程のなかで、D・ベルもその一員である。「ニューヨークユダヤ人知識人」という、個別メンバー間の様々な相異にもかかわらず一つの共同性をもった一つの集合体が形成され始め——それは、「新しい知識人」や「エミグレ知識人」を継承するものであり、「労働知識人」の流れとも一定程度交錯する——、後に様々な分野で多くの問題提起をするようになったのは注目し値する。さらにまた、一九三〇年代は、体制側からも「福祉型」国家独占資本主義の計画的管理運営のために、知識人に対する要請が強まり、ウッドロー・ウィルソン政権にその萌芽が見い出される知識人のブレンントラスト化——政策形成知識人の創成——が急速に進行した時期でもあった。このような一九三〇年代は、従来、圧倒的多数のアメリカ知識人がアメリカ社会に対して一定の距離を保っていたことを思えば、たしかにきわめてユニークな時代であったと言うことができる。しかしこのようなユニークな時代もそれほど長続きせず、一九三〇年代末から四〇年代にかけてアメリカ知識人をとりまく状況はその様相を一変してしまったのである。

一九三〇年代末から一九四〇年代にかけて大量のアメリカ知識人たちは、「知識人の疎外」と呼ばれている経験を味わった。「知識人の疎外」はどのような原因で起ったのだろうか。筆者はこの点を次のように総括している。

「アメリカの四〇年代は、知識人の疎外の時代である。多くの共産黨員知識人は、独ソ不可侵条約の締結によって衝撃的な打撃をうけて離党していった。しかし共産黨員数のピークは、その条約の締結時よりも後にくるのであるから、この動きはきわめて知識人的なものであったと言えることができる。社会党は、三〇年代には多くの派閥抗争を経験しながら、党を左翼的に純化していった。その担い手の多数は、知識人黨員だったと言えるだろう。しかし党の左翼的純化が頂点に達したとき、社会党はそこに大衆を見い出すことができず自壊していった。またトロツキスト運動は、四〇年の大分裂によって、一方の労働者大衆を中心にした社会主義労働者党と知識人や学生を中心とした労働者党に分裂してしまった。

三〇年代に、労働知識人たちは、C・I・O運動において積極的な役割を果たした。しかしC・I・Oが確立されてしまうと、かれらはC・I・Oのリーダーシップを担う人びとの知的手段としてのみ存在することを許され、その知識人性を放棄せざるをえなくなってしまうのである。

文学運動も独ソ不可侵条約の締結以後自壊の道をたどってしまった。その主要原因の一つは、文学運動が政治に従属させられ、内在的な発展を遂げえなかったということにある。

それでは、このような知識人の疎外をもたらした原因はどこら辺にあるのだろうか。よくアメリカでは、その最大の原因として、政治左翼（とくに共産党）の政治指導の問題が指摘されている。たしかに政治左翼の犯した誤りは知識人の疎外をもたらした一つの原因ではある。しかし政治左翼に全責任を負わせることはやさしいが、そうすることに

よっても問題はほとんど解決されない。政治指導の誤りに加えて、われわれは知識人自身が革命や社会変革を自己の欲求にまで深化・定着させることができなかったという知識人自身の主体的責任を問わなければならないだろう。さらに、知識人の問題は裏をかえせば大衆の問題でもある。したがって知識人の疎外は、当時の大衆のあり方と深いかわりを持っている。大衆特に労働者階級の内的構成、生活、意識などの総体が、知識人の疎外の問題と密接に結びついているのである。知識人の疎外というのは、知識人たちが、大衆の内的構成、生活、意識などを理解し、その理解をふまえて運動のなかでかれらとともにみずからを变革主体へと上昇してゆくことに失敗してしまったことを意味するのである<sup>(6)</sup>。

「反ファシズムのための聖戦」としての第二次世界大戦とその後の反共世界戦略の展開のなかで、アメリカは「外交問題知識人<sup>(7)</sup>」と呼ばれる大量知識人を生み落とすと共に、彼らの数をますます増幅していった。彼らはアメリカの反共戦略の担い手として、政治化の度合がきわめて高いことをその特徴としていた。

このような知識人によって冷戦が闘われる一方、国内的には知識人の制度化の過程が急速に進行した。アメリカにおいては、知識人の制度化過程がマッカーシズムの文脈のなかで進行したことに充分注意しなければならない。アメリカにおいては「三〇年代におけるマルクス主義への接近も、それからの転向も、権力による強制がなかっただけに個人の思想的責任は重い<sup>(8)</sup>」と言われているが、その個人の思想的責任がマッカーシズムの文脈において問われたということは重要である。その結果、多くの人びとがマルクス主義とのかかわりをできるだけ黙って安全な生き方を選択してしまったのである。

マッカーシズムの結果は、社会秩序がより一層の社会改革の必要前提条件であることを人びとに認識させ、また

マッカーシーが政治的に「エスタブリッシュメント」によって打ち破られてしまったことが、伝統的な社会秩序が機能しているとの認識に人びとをより一層走らせることになったのである。多くの知識人たちは、現代のジャコバン、ポピュリスト、マッカーシー対伝統的な社会秩序という図式をつくり、後者を称揚していったのだった。

このマッカーシイズムの切り拓いた地平に、アメリカは「通常」の政治過程を通じて平等社会へと進展している」という認識が定着し始める。イデオロギーの終焉は、マルクス主義、知識人政治、運動の終焉のことであり、そしてポピュリズムの批判であり、スペンシャリスト、エキスパートの評価、市民政治、多元主義の賛歌である。

あらゆる領域を巻き込む形で展開された冷戦も、五七〇五八年頃になると新しい局面を迎えることになった。戦後世界も複雑さを増し、それに対応するためには「反共主義においてプラグマティック」な立場が必要だった。帝国アメリカの未来に危機感を持ちそれに突き動かされて先の立場をとって現われたのがJ・F・ケネディである。ケネディ時代には、外交から国内問題へと力点のおきかたが相対的に移動し、国内における諸問題に対して「アクション・インテレクチュアル」と呼ばれる人びとが様々な対応をみせた。彼らは、権力と思想の統合をめざしたのであり、彼らの背後には大学、政府、知識産業の巨大化にもなつて大量に生成された制度的知識人が存在したことは言うまでもない。

しかし一九六〇年代はこれとは対照的に、三〇年代以来久々に新しい左翼知識人が形成され活躍した時代でもあった。かれらは、五十年代に文化の領域で左翼の立場を保ちつづけた知識人たちにはげまされ、また黒人運動に触発されて、人間としての当然の権利を獲得すべく運動し、資本主義の諸矛盾と闘った。そしてその過程で彼らは、資本主義の高度化が労働する人間の精神的要素を急速に開発するとともに、労働する人間はますます対象化された労働に従

属していかざるをえないという矛盾を持った「特殊性知識人」<sup>(10)</sup>（ミッシェル・フーコー）たらざるをえないことを発見した。

「マスコミ現象」としての新しい左翼の運動は、一九六八年頃を境にしてたしかに衰退してしまったように思う。しかし新しい左翼たちの提起した問題は、形を変えいわばみえないところで地道に追求されつづけている。ミッシェル・フーコー言うところの「特殊性知識人」——つまり、現代における「直接的権力」に対する闘争において、知識人が役割を果し得、かつ有用であり得るのは、彼の知の専門的特殊化においてであって、その意識＝良心の普遍性においてではない、ということ。知識人は普遍性の哲学者である必要も作家である必要もない。誰でも自分の専門の領域で、知に密着した権力の行使に抵抗し、その発動を困難ならしめることができるということ——も現在のアメリカの体制の抱えた矛盾の一つとして大いに問題にされつつあるのである。<sup>(11)</sup>

現代社会においては、権力は知識というチャネルを通して行使される。こうした状況を前にしては、各人は自己の知の社会的機能について反省を迫られる。一九六〇年代における支配的な社会学に対する諸々の新しい社会学の挑戦は、大なり小なりこうした立場をふまえて展開されたと言えよう。そのなによりの証拠は、こうした流れが一九七〇年代には社会学の社会学乃至知識社会学という一つの焦点を結んだということである。現代社会学における知識人論の復活という事態は、こうした視角からも論ずることができよう。<sup>(12)</sup>

もっとも、現在のアメリカで優勢が伝えられるのは新保守主義の知識人である。この知識人たちは、とくにL・B・ジョンソン政権以降連邦政府が余りにも多くのものを約束しすぎたとして連邦政府とその政策を批判し、またウォーレン・コートなどの裁判所も秩序を混乱させるのにあずかって力があつたと批判する。そして六〇年代に噴出し



た社会的葛藤から自由になるためには、ファンダメンタルな立場に戻ることが必要であり、多くの知識人がロックよりもE・バークの社会理想に戻ることを主張しているのである。要するに、如何なる場合にも政治権力の再配分に関するものは絶対に許さずポピュリズム批判を正面にすえているのが新保守主義者たちである。<sup>(13)</sup>

## 二 D・ベルの社会観

——マルクス主義との対比において——

さて、アメリカ知識人の社会史の一角にD・ベルを位置づけるためには、先にも触れたように「ニューヨークユダヤ人知識人」の問題を明らかにすることを不可欠の課題としている。<sup>(14)</sup> 移民の子であり、労働者階級や小ブルジョア的出自を持ち、恐慌のなかで育ちながら文化に餓え、強い疎外感を持ちつつ政治的ラディカリズムを追求しながらやがては傷つき転向していった知識人の集合体としての「ニューヨークユダヤ人知識人」たち、その総体を明らかにすることは、D・ベル理解の必須の前提となる。残念ながら本稿ではこの点に関して深く立ち入る余裕を持たないがしかし、ベルがきわめて早くから終始一貫して社会主義、共産主義、マルクス主義に興味を持っていたこと、アナキズムの影響も強かったこと、これまた首尾一貫して社会民主主義者であったことなどは周知のこととして指摘しておきたい。<sup>(15)</sup> そうした土台があったからこそ、一九五〇年代後半全世界的にポスト・スターリン主義の左翼世代(E・モラン、L・ゴルドマン、C・タイラーなど)がマルクスに対して新たな関心を持ち始めた時、ベルは別の角度からマルクスの思想を正面に据えることができたのであった。

一九三〇年代はアメリカにおいてはじめてマルキスト・スカラーシップが興隆した時期であった。マルクスの解説

者として中でも大きな影響を持ったのは、S・フックであった (*Towards the Understanding of K. Marx*, 1933, *From Hegel to Marx*, 1936.) しかしS・フックの当時の知的問題は唯物論の思想の擁護にあったといわれ、そのために彼はマルクスをナチュラリストと解釈し、また社会的決定論（存在が意識を決定するといった主張）とクラス・テレオロジー（社会主義意識を労働者階級に対して外部から注入するといった主張）の間の矛盾を解決するためにマルクスをプラグマティストと理解したのであった。<sup>(16)</sup> このようなS・フックのマルクス理解は大きな影響を与え、ベルはこのようなマルクス理解を批判しているものの、ベルのマルクス理解もフックのそれによって大きく影響されることになった。

ところで、ベルとマルクスの関係について論ずるためには、もう一つの文脈をさぐっておかなければならない。言うまでもなくそれはベルと、フックが一回も言及することのなかった疎外概念との出会いである。<sup>(17)</sup>

K・マルクスの『経済学・哲学草稿』は、一九三二年にドイツで公開された。しかしヒットラーの抬頭、社会民主党——共産党の崩壊、ドイツの学者共同体の離散は、少数の例外を除いてこうした著作を詳細を検討する余裕を与えなかった。舞台の一つはアメリカに移る。ニューヨークにおける若い世代のラディカルな知識人たちは、モスクワ裁判以降みずからのよって立つ存在根拠を失ってしまったが、M・ホルクハイマーを中心としたフランクフルト社会研究所の亡命は、彼らにとって一つの光明であった。<sup>(18)</sup> ここから初期のマルクスに対する関心が芽ばえ、とくに疎外という概念が注目をあびた。まずはじめにこの観念の適用は、心理学や文学の領域でおこなわれ、大きな反響をえたのである。

この疎外の概念は、一九四〇年代から一九五〇年代の初期にかけて、キルケゴールやカフカの再発見を媒介にし

て、影響力を増していった。これには深い理由がある。というのは、ナチズム、戦争、強制収容所、恐怖の存在等々はこの世代のもっとも深い信念をゆさぶらずにはおかなかったのである。ここから二つの議論が現われた。第一の議論は、こうした諸々の出来事は特殊な歴史的環境、社会的条件のもとでおこったものであって、それらは合理主義そのものを告発するものにはならないというものであり、第二の議論は、「合理主義は、人びとをそうした悪に対して武装しないままに放置しておくのではないだろうか」というものであった。第二の議論を展開した知識人の代表者の一人として、ラインホルト・ニーバーをあげることができる。この第二の議論が切り拓いた地平にドイツ社会学のK・マンハイム、M・ウェーバーの議論が入って来て、疎外という概念の妥当性、重要性を支持、補強する結果になったのである。

ベルは、こうした流れの延長線上に位置している。彼は、ヘーゲル→ブルーノ・パウワー→フオイエルバッハ→『経済学・哲学草稿』→『ドイツ・イデオロギー』→『共産党宣言』→『資本論』という順序を追ってマルクスにおける疎外概念を検討した。その結果、彼は次のような結論に到達した。①マルクスは、従来のドイツ哲学において疎外が存在論的事実として考えられていたのに対して、それを「歴史的諸関係の特定の制度に根ざす社会的事実」として考える必要を説いた。しかし、マルクスは疎外の概念をこのように狭めることによって「疎外の源泉を私有財産制のみに固定化する誤りと、ひとたび私有財産制が廃止されるなら、人間はただちに自由になるだろうという考え方にみられるユートピア的理想の旋律を導く危険<sup>(20)</sup>」を作り出した。②その危険をいっそう助長するかのように、マルクスはその後の研究のなかで、あの疎外の物質的表現すなわち搾取の過程の研究に専心していった。③その研究のなかで、マルクスは初期のある種の抽象概念から別種の抽象概念へ移っていった。つまり、初期の類的人間にか

わって経済的階級が唯一の社会的現実として現われてしまったのである。その結果は、今日の社会主義社会の現実とも密接なかわりがある。④そこで、われわれは初期マルクスの疎外概念に立ち帰ってそれを発展させなければならぬのであるが、その課題の展開をマルクスに頼ることはできない。われわれはその問題の展開を具体的には労働過程論に対する取り組みの中で考えていかなければならぬ。⑤こうすることは、「マルクス主義社会学」の重要な課題の一つである。

以上のような形で、マルクスからの二つの道——この場合は疎外と搾取であるが——を探究するのは、ベルの重要な課題の一つである。現在ベルが展開している脱産業社会論という名の社会発展論も、その一つであろう。

ベルのマルクス理解は、それなりに高い水準に達しているように思われる。それにもかかわらず、われわれはベルのマルクス理解の問題点をいくつか指摘しておかなければならない。

第一の問題点は、ベルのマルクス理解がS・フックのプラグマティズムのフィルターを通しておこなわれ、マルクスの人間観が「工作人」(ホモ・ファールベル)としてのみ理解され、マルクスの歴史的弁証法が、漸次分化的な単線的な物質的發展の過程として——要するにマルクスは機械的な唯物論者として——考えられている点である。その結果、ベルにあつては、自己をして社会的役割の拘束を越え出ていかせる思考における「クリティカルなモメント」が範疇として確定されていないことになる。<sup>(21)</sup>

第二点は、ベルが「疎外は新鮮な、しかも実りある現代社会の批判であるけれども、それは『歴史的』マルクスではない」<sup>(22)</sup>「疎外という概念が何らかの意味があるとするならば、それは自分自身の足でたたなければならぬ」(つまり、マルクスをあてにし依拠することはできない)と言っている点である。これは、ベルが初期のマルクスの疎外

概念と後期の搾取概念の間には断絶こそあっても何らの有機的な関連もないと判断していることを示しているのであるが、果してそうであろうか。そうではなくて内田義彦氏が言うように「人間と自然との物質代謝過程の理論という初期マルクスの思想の凝集点が『資本論』の体系のなかでどう展開されてくるのかを、おさえること」<sup>(23)</sup>が重要である。そうすれば、マルクスが類的存在としての人間を階級へと分割してしまい、唯一の社会的実在は人類でもなければ個人でもない経済的階級であるとし、諸個人とかれらの動機を無と考えたとは到底言えないであろう。

第三の点は、社会発展論にかかわる問題である。ベルはマルクスの発展論には、資本蓄積の歴史的傾向——二大階級への分化——を論じた図式Ⅰと管理者、技術従業員、ホワイトカラー労働者といった「新らしい」中間階級の出現を論じた図式Ⅱという二つの図式が存在していることを論じているが、言うまでもなくこれはマルクスからの唯一の道（二大階級分化論）に対するもう一つの道の剔出である。ここでもベルは、マルクスから出発しながらヴェブレンやR・コッリーを介してマルクスのなかに脱産業社会論をみている。この議論は、管理者、ホワイトカラー労働者などを社会変革の主体としてのポテンシャルを今なお保持している未来の労働者階級のエンブ・リオー（A・グールドナール）と考える視点をわれわれに与えてくれて有効であるが、そのことを前提として、図式Ⅰと図式Ⅱを有機的に関連づけ統一する理論の提示、構築をわれわれは課題としていないだろうか。

さてベルによれば、マルクスはF・ベーコンと共に実践的活動と、自然の諸カテゴリーを再加工するプランの積極的な形成者としての精神の役割とを強調した新しい自然観を持った人物であった。しかしマルクスは、人間は自然を転換することによってはじめて充足することができると欲求をもっているがために精神だけによっては世界を変革することはできぬと考え、「物質的欲求や物質的諸力の活動理論」<sup>(24)</sup>を構築しようとした。そして彼は、人間の力のエー

ジェンシーとして技術を考え、歴史を生産諸力の歴史と考えたというのである。

以上のような議論を一応ふまえて、ベルはどちらの方向へ議論を展開しようとしたのだろうか。ベルは、技術を機能、エネルギー、構成（フアブリケーション）、コミュニケーションとコントロール、情報処理のための手順（アルゴリズム）という五つの次元に分けて解明し、その技術の効果が経済の中軸を変え、人びとの相互作用の密度を増大させることを主張した。つまり技術の展開は、社会構造の分化と文化のシンクレティズムをもたらすのであって、ベルはこうした技術と文化の相互作用によって歴史をみることを提唱したのだった。文化とは「象徴の製作者が意識的に存在の意味を規定したり、その意味のための正当性を発見することである<sup>(25)</sup>」。両者は全く没交渉の別個の領域を構成するもので決してないのである。

ベルにとっては、社会は外的な人為的な構成物ではない。それは、人間がその欲求と欲求充足の交換をレギュレートするために作り出した一連の社会的なアレンジメントであり「意識と目的によって規定された道徳的秩序であり、かつまた社会契約」である。それは分析的に言って三つの次元——文化、政治、社会構造——を持つ、文化は表出的な象徴主義の領域であり、政治は正義という原則にもとづいてコンフリクトを解消してゆく領域であり、社会構造は経済、職業体系の領域である。三つの領域は相対的に独自の原則にしたがってまた独自のリズムに合わせて動いてゆくのである。とくに人間経験の連続性をうたう文化とたえず社会規範を破ってゆく社会構造とは鋭く矛盾し、その両者を政治が媒介する。したがってベルの理論は三つの領域の矛盾を見透しているものであって、土台——上部構造とか構造——機能間の決定論的なまでに密接な連関を言っているのではない。つまり、社会構造が政治や文化に対して問題を提示する以外、それに対する反応の様式間には何の必然的な関係もなく、社会変動の過程は、普通考えられてい

るよりはずっとオープンな過程だといっているのである。ここにハルの社会把握の特色が存在するのである。

(註)

- (1) Daniel Bell, *The "Intelligentsia" in American Society*, lecture at Hebrew Union College, January 18, 1976. p. 4 か  
ち再引用。
- (2) Lewis Feuer, "What is an Intellectual?" Aleksander Gella ed., *The Intelligentsia and The Intellectuals, Theory, Method and Case Study*, SAGE Publications Inc., 1976., p. 48
- (3) この点に関しては、次の論文で詳述しておいた。拙稿「アメリカ一九三〇年代の社会運動と知識人の問題」、社会運動研究同編『一九三〇年代と知識人』未来社、一九八〇年刊。
- (4) Daniel Bell, *op. cit.*, pp. 12-13.
- (5) この知識人に関しては、次の諸論稿を参照のこと。Daniel Bell, *op. cit.*, pp. 16-29, Irving Howe, "The New York Intellectuals" *Commentary*, March 1961, pp. 306-59. また、その社会学派に関しては拙稿「アメリカ社会学と現代思想—社会学のニューヨーク学派を中心として—」『現代思想』四卷一三号、一九七六、十二月をも参照のこと。
- (6) 拙稿「アメリカ一九三〇年代の社会運動と知識人の問題」より。
- (7) Theodore Draper, "Intellectuals in Politics", *Encounter*, December, 1977, p. 51.
- (8) 本間長世『理念の共和国』中央公論社、一九七六年、二二九頁。
- (9) Theodore Draper, *op. cit.*, pp. 52-53, Isidore Silver, "What Flows from Neo-Conservatism", *Nation*, July 9-16, 1977, p. 47.
- (10) ミッシェル・フーコー「性と政治を語る」『朝日ジャーナル』一九七八年五月十二日号、二〇頁。
- (11) この点に関しては、例えば、Irving Kristol, *Two Cheers for Capitalism*, Basic Books, 1978. を参照のこと。
- (12) 拙稿「グールドナーの『自己反省の社会学』」『現代社会学』第六巻第一号、一九七九年。同じく拙稿「社会学の社会的機

能—合理性の社会学をめぐる」『社会学研究』第三十七号、一九七九年を参照してほしい。

- (12) Isidor Silver, *op. cit.*, p. 49.
- (14) この点の解明は他日を期したい。
- (15) 拙稿「D・ベルの軌跡」『Da』一九七六年九月号参照。
- (16) Daniel Bell, "The Debate on Alienation", Leopold Labedz ed., *Revisionism: Essays on the History of Marxist Ideas*, Frederick A. Praeger, 1962, pp. 196-197.
- (17) *Ibid.*
- (18) フランクフルト社会研究所のアメリカにおける影響力に関する評価は未だ定まっていないうちと思われるが、近年この影響が実はかなり大きかったことが判りつつあるように思われる。たとえば Edward Shils, "Tradition, Ecology and Institution in the History of Sociology" *Daedalus*. Vol. 99, No. 4, (1972).
- (19) Daniel Bell, *op. cit.*, p. 209.
- (20) Daniel Bell, *The End of Ideology ~On the Exhaustion of Political Ideas in Fifties~*.  
(岡田直之訳『イデオロギーの終焉—一九五〇年代における政治思想の涸渇について』東京創元新社、一九六九年) 邦訳、一七二頁。以下の結論の要約も同訳書による。
- (21) Trent Schroyer, "Review : Daniel Bell, *The Coming of Post-Industrial Society : A Venture in Social Forecasting*", *Telos*, No. 19, Spring 1974, pp. 165-166.
- (22) ベル前掲訳書、一七七頁。及び Daniel Bell, "The Debate on Alienation" p. 197. を参照。
- (23) 内田義彦『資本論の世界』岩波書店、一九六六年、一一六頁。
- (24) Daniel Bell, "Technology, Nature and Society" *American Scholar*, Summer 1973, p. 393.
- (25) *Ibid.*, p. 386.